アナミズ

自然の恵みがいっぱい

能登半島 穴水町（星もいっぱい） ★★★★★ 町勢要覧

プリッ!!

ようこそ まいもんの里へ

かき・いさざ・ささえ・なまこ

四季彩アルバム

自然と生きる

海の物語/ワインの物語/森の物語

原風景の旅

清流の山里「四村地区」/昔ながらの佇（たたず）まい「中居地区」

昔むかしのお話

踊る塩さば/沖波の官女伝説/ウデよし、声よし、器量よし

ローエルが愛したまち

—NOTO ANAMIZU—

Percival Lowell（1855～1916）

ローエルが「怪鳥ロックの巣」と形容したボラ待ちやぐら

明治22年、一人のアメリカ人が能登を訪れた。パーシヴァル・ローエル。海王星の外側に未知の惑星・冥王星があることを予知した天文学者である。彼はこのまちの美しさに魅かれ、その神秘的な光景を紀行文『能登・人に知られぬ日本の辺境』に書き記した。ローエルが憧れを抱き、世界に紹介した能登・穴水の自然。その豊かさは百年をへた今も変わらず、多くの旅人を魅了しつづけている。

ローエル記念碑（上）。毎年5月にはローエル祭が開催される

ローエルがこよなく愛した美しい星空

contents・目次

③ ローエルが愛したまち

④ 四季彩アルバム

⑧ 自然と生きる
海の物語/ワインの物語/森の物語

⑫ まいもんの四季
かき〈かきの一生〉
いさざ/さざえ/牛肉

⑮ まいもん珍味特産品
なまこ/このわた/くちこ/もずく/かぶらずし/きびもち

⑯ 歴史を訪ねて
明泉寺/来迎寺/長谷部神社/穴水城址

⑰ 伝統祭彩 あなみず祭時記

⑱ 原風景の旅
自然の息づかいを感じて…「四村地区」
風光明媚な鋳物の里「中居地区」

㉒ 昔むかしのお話
踊る塩さば/沖波の官女伝説/ウデよし、声よし、器量よし

㉔ 能登半島と首都圏がぐっと近くなりました

㉖ まちづくりビジョン
福祉・健康/教育/産業/環境整備/文化/行政・議会

㉜ アナミズ・グラフ 穴水町のあゆみ

㉞ イラストマップ 穴水で遊ぶ!

平成14年4月発行
平成19年4月改定

発行・編集 穴水町企画情報課
制作協力 株式会社博文堂
印刷 能登印刷株式会社
デザイン フォーレ コミュニカティヴ

昼下がりのヨットハーバー

海面を滑るジェットスキー

マリンスポーツのメッカ・椿崎

強い日ざしを浴びて咲き誇るひまわり

沖波大漁祭り

鹿島の森へ続く道

立戸ノ浜海水浴場

甲地区の子どもたち

Summer 夏

きらめく

きらめく入江の向こうに、
幼き日の想い出が揺れる

おだやかな穴水湾

四季彩アルバム

桜模様の能登鹿島駅

水ぬるむ小又川

Spring 春

ときめく

やわらかな風に大地がほほえみ、
花のささやきにまちがときめく

四村のツツジ

のどかな七浦七入

来迎寺の菊桜

うららかな四村地区

春風と遊ぶ菜の花

穴水大宮の八重桜

苗が揺れる水田

新雪に包まれた在所

夕暮れの潮騒の道

ゆっくり時が流れる

粉雪積もる山寺の参道

初雪を見つめる子犬

根木のボラ待ちやぐら

ひっそりたたずむお堂

冬 Winter

かがやく

凍てつく空のかなたに、
伝説の星座が静かにかがやく

澄みきった空気に降るような星空

うっすら雪化粧したかき筏

静かな山里の秋

秋 Autumn

いろづく

いろづく山々に木の実が熟し、
恵みの里が黄金色に染まる

さつまいもの収穫

入江を飾る紅葉

鮮やかに黄葉したイチョウ

二子山のくり

長谷部神社のモミジ

野山を彩るコスモス

秋めく校庭

実りの衣をまとったハザ

暮らしを支える恵みの海

自然と生きる
海の物語
“七浦七入”に抱かれて

昔ながらの漁がのどかに営まれて…

一年を通じて波おだやかな穴水湾は、四季折々に豊かな海の恵みをもたらす。春から夏へ、そして秋から冬へ、人々は海の物語によって季節の訪れを知る。

【いさざ漁】

春3月、ようやくうららかな春陽が差すころになると、穴水湾の小又川河口などで、四ツ手網を使ったいさざ漁が始まる。いさざは体長5センチほどのハゼ科の小魚。小又川を流れる雪解け水がぬるみ始めると産卵のため海から遡上することから、「春の使者」とも称される。やや黄色みを帯びた半透明の魚体が網の上でピチピチ跳ねる様子は、いかにも春の訪れを告げる魚にふさわしい清々しさがある。

漁が行われるのは、早朝から夕方まで。暖かい日には、網にいさざを追い込むための足場が地元の人々の歓談の場に変わることもある。のどかな春の一コマだ。

春の風物詩・いさざ漁

【ボラ待ちやぐら】

「木を組み、日ぐらし魚を待つ」という字の通り、櫓（やぐら）の上で辛抱強く魚を待つ伝統のボラ漁は、数年前まで5月の終わり頃から秋口まで行われてきた。

漁法はいたってシンプル。海に組んだ高さ8メートルほどのやぐらの上で、じっと海面に目を凝らして辛抱強くボラを待つ。やぐらの下には網が仕掛けられており、やがて魚の群が回遊してきたことを見定めると、いっきに網の口を締めて獲物を引き上げる。一見のんきそうなこの漁法、実は鋭いカンと絶妙のタイミングが必要。発祥は江戸時代といわれ、最盛期には一日2000本もの漁獲があったという。今では観光用にわずか2基が立つのみだが、穴水といえばまっ先にあげられる町のシンボルだ。

ライトアップされたボラ待ちやぐら

【かき漁】

七浦七入と呼ばれるリアス式海岸の入江は、絶好のかき養殖場。昭和初期、麦ケ浦を中心に始められたかき養殖は年を追うごとに盛んになり、現在では日本有数のかき産地となった。

晩秋から春先にかけて、麦ケ浦をはじめ、中居、志ケ浦などの一帯は、おびただしいかき養殖筏からかきを引き上げるかき漁で賑わう。

いさざ漁師
中村眞佐子さん

鬼ごっこのような漁

「穴水には7つの川があり、いさざの漁師は現在、87人います。50年ほど前の全盛期には400～500人もの漁師がいたそうです。私は20歳で嫁いでからときどき漁に出ていましたが、本格的に始めたのは10年ほど前からです。漁は自然に大きく左右されるもので、雨が降った次の日は川が濁ってとれませんが、あいの風や北風が吹く日は波にのっていさざが海からどんどん上がってきます。昔に敏感ないさざを棒でおどかし、網の中に追い込む。いさざの心理を読まなきゃいけない。子供のころやった鬼ごっこみたいなものですね。県外から冷凍ものが安く手に入るうちでも、地物のいささは新鮮でおいしいと人気があります。昔ながらの習慣で、バケツを持って川に買いに来る人もいるんですよ」

自然と生きる
ワインの物語
大地の恵みに感謝して

県内初の本格ワイン醸造工場

穴水から世界へ発信 能登ワイン

肥沃な大地が自然の豊かな恵みを育む――。平成13年ここ穴水の地に、能登半島で初めて加工用ぶどうの苗木が植えられて以来、「ワイン造りは農業」「良いワインは良いぶどうから」を合言葉に、現在では延べ16ヘクタールにわたり広大なぶどう園が整備されるまでになった。そして、平成18年8月にはワイン醸造工場に直売施設を兼備した「穴水まいもん工房」がオープン。多くの見学者でにぎわいを見せている。

能登ワインのコンセプトは「能登で収穫したワイン専用品種による100%生ワイン」。赤白8種類の本格的なワインが市場の人気を博している。

また、ワイン工場の近くには「まいもん体験農園」や自炊型宿泊交流体験施設「四季の丘」などが整備されており、辺り一帯はグリーン・ツーリズムの拠点ともなっている。

二子山開発地での加工用ぶどう栽培

能登ワイン株式会社
米田由加利さん

私たちが心を込めて
能登ワインを造っています

能登ワインの2階ギャラリーでは、私たちが生産したワインを展示販売しています。試飲コーナーでは四季折々の風景を眺めながら、ちょっと気になるワインを試飲することができます。また、お客様のワインを保管熟成する熟成庫も完備しています。時の移ろいと共に変化する、ちょっと贅沢なマイワインもお楽しみいただけます。

能登ワインの醸造工場は施設見学、試飲ともに無料です。能登産ぶどう100%の本格ワインを味わいに、ぜひお立ち寄りください。

たわわに実るぶどう

能登の恵み100%

待ちわびた春に大きく背伸びするワラビ

自然と生きる
森の物語
季節の実りを求めて

生命の息吹と恵みにあふれる

いつの季節も、森の中には生命の息吹が満ちている。

春、木々の枝先に黄緑色の新芽が萌え始めると、地表ではワラビやゼンマイが柔らかな頭をもたげる。やがて夏の訪れとともに木々は深い緑の衣をまとい、涼やかな木陰に人々を憩わせる。

そして梢をわたる風がセピア色に変わり、木々の葉が赤や黄色に色づき始めると、穴水の森はいよいよ豊穣の時を迎える。

二子山の傾斜地には、県内でも数少ない観光くり園がある。わせの「丹沢」「伊吹」、おくての「筑波」「石槌」などが手の届く高さで次々に実を結び、やがて茶色に熟したイガの割れ目から太った実がはじける。

一方、山伝いの森ではマツタケをはじめ、ヒラタケ、ナメコ、クリタケ、シバタケなどが木々の根元に顔を出す。頭上にはアケビなどの木の実をついばむ小鳥たち。ひとしきり実りの喜びに賑わった森は、ふたたび巡りくる春に向かい、新たな生命を蓄える。

まるまる太った二子山のくり

あちこちで山菜が顔を…

楽しいくり拾い

穴水町林業研究会
表 義明さん

みんなで森を育てていきたい

「穴水の森を守り育てるために、県外視察なども含めていろいろな取り組みを行っています。研究会のメンバーの職種はさまざまで、森を愛する人であれば誰でも入ることができます。みんなでひとつの目標に向かって活動するのはとてもやりがいがありますね。穴水の森は彩やヒバがほとんどです。木は同じ種類でもそれぞれ表情が違う。製材加工しても生きているのを感じます。将来は、香りが良く、くさらない能登ヒバを全国的にメジャーにしたいと思っています。ヒバは青森と能登にしかない貴重な木材なんですよ。今はまず、私たちの取り組みをもっと住民に知ってもらおうと、広報活動に力を入れています」

まいもんの四季

豊かな自然に恵まれた穴水には、春夏秋冬、それぞれに自慢の「まいもん」があります。四季を通して繰り広げられる「まいもんまつり」で、とびっきりの旬を味わってください。

冬 かき プリッ! とろり!!

穴水のかきは、小粒ながら身がしまって口の中でとろけるような美味しさ。

かきまつり

1月10日～3月31日

とれたてのかきを、炭火で焼く野趣たっぷりの食べ方が評判。そのとろける口当たりを存分に味わえる。1月下旬には、150mの炭火コンロでかきを焼く人気イベント「雪中ジャンボかきまつり」（役場前）も開催。

まいもんまつり実行委員会委員長

坂谷吉春さん

穴水を代表する大イベントに定着

「まいもんまつりが始まってから、もう20年以上経ちます。かきまつりは3ケ月間で来客者数3万人ほどで、県外からも多くの人が訪れる大イベントに成長しました。ジャンボかきまつりでかきを焼くコンロの長さも、当初30mだったものを150mにまで延長したんですよ。身がしまった穴水のかきのおいしさを存分に楽しんでいってもらいたいですね」

穴水湾 かき物語 かきの一生

1 卵から赤ちゃんへ

かきの産卵は、夏（6～8月）に行われます。生まれた卵は、数日間で、赤ちゃん（幼生）となります。かきは、岩や貝殻に付着して大きくなる貝なので、赤ちゃんは、海を漂いながら、くっつく場所（もの）を探します。

2 貝殻にくっつく

産卵が行われる頃、漁師はほたて貝の殻をつなげたものを、のれんのようにぶらさげて、それを海にたくさん投げ入れます。赤ちゃんはそれにどんどんくっついていきます。くっついたかきは、数週間で数センチの貝となり、目でも確認できるようになります。

ブイが浮かぶ養殖場

3 太陽に当てられる

貝殻にくっついた種かきは、夏場の一定時間、海からあげられて干されます。そんな環境の変化に、強いかきだけが生き残っていきます。

いよいよとりいれ…

4 豊かな海の中で大きくなる

種かきは、筏に、さらに養殖用ブイにつながれ、海の中で、プランクトンを食べてどんどん大きくなります。ただし、その成長を妨げる敵も襲ってきます。黒貝などで、彼らがのれんにくっつくと、かきは成長できずに死んでしまいます。そこで、漁師は定期的に駆除する作業を行います。

5 水揚げされる

秋（11月初旬）から冬、いよいよとりいれの時期。すっかり成長したかきは、海から引き上げられます。そして、きれいに洗われ（むき身にされ）、市場をへて、食卓に。生まれて約1年半～2年、かきの一生はこれでおしまいです。おいしいかきが育つのも、美しくおだやかな入江があるからです。いつまでも豊かな海をみんなで守っていきたいものです。

ウインチで海から引きあげられる

かき養殖業・民宿経営

濱崎源治さん

手塩にかけて育てています

「私が本格的にかきの養殖を始めたのは48歳の時。10年以上前になります。かきのおいしさは、どれだけ手間ひまをかけたかにかかっています。強い種かきを育てるために、夏場の一定時間、かきののれんを低にあげて干すんですが、炎天下の作業で、とても体力がいります。そして晩秋の頃、手塩にかけて育てたかきを水揚げする。そのとれたてのかきを食してもらおうと、民宿も営んでいます。かきのフルコースに、常連さんも多いんですよ。うれしいのは、最近、息子が養殖を手伝ってくれるようになったこと。とても、たのもしいですね」

春 いさざ するり！

能登に春を告げる小魚。昔ながらの四ツ手網によるいさざ漁は穴水の風物詩。

いさざまつり

3月中旬～4月10日頃

透き通ったいさざを二杯酢につけて生きたまま飲み込む踊り食いや、卵とじなど、独特の味わいが楽しめる。

夏 さざえ こりこりっ！

波静かな入江で育った穴水のさざえは、身がとてもやわらかいと評判。

さざえまつり

6月15日～7月15日

鮮度抜群、磯の風味たっぷりのさざえのフルコース（つぼ焼き・造り・酢の物・さざえご飯など）が賞味できる。

秋 牛肉 がぶり！

能登の自然と風土の中で丹精込めて育てられた、上質の牛肉。

牛まつり

10月1日～10月31日

やわらかい牛肉を使ったコース料理（しゃぶしゃぶ、ステーキ、牛カツなど）が味わえる。

まいもん 珍味 特産品

まいもんの里が誇るちょっと珍しい特産品。どれも自然の味と香りが生きています。

まいもんの四季

もずく

1月から4月にかけてがもずく漁の最盛期。やさしい磯の香りを。

くちこ

なまこの卵巣を三角形に干したもの。クセがなく食べやすい。

海の珍味セット

なまこ

そのグロテスクな姿からは想像もつかない上品な味。酢の物で。

このわた

なまこの腸の塩辛で、日本三大珍味のひとつ。酒のつまみに最高。

かぶらずし

赤土で栽培した白かぶに、さばの切り身をはさみ、糀で熟成した漬け物。11月～1月が旬。

きびもち

かつて農村でよく食べられたきび団子の粉と餅米でつくった素朴な味。

伝統祭彩

華やかに、厳かに、季節を彩る昔ながらの祭礼

8/17·18 沖波大漁祭り

キリコが海中を練り歩く

海の安全と大漁を祈る祭で、数百年もの歴史があるといわれている。初日、5台のキリコが笛やカネ、太鼓にはやされて通りを練り歩き、恵比寿神社へ。翌日には、海中へキリコをかつぎこみ暴れ回る。その勇壮な舞いには、思わず目をうばわれる。

7/中旬 長谷部まつり

雅やかな時代絵巻

平家物語にも登場する豪勇・長谷部信連をしのぶ祭事で、往時の武者行列を再現。華やかな武者行列のほかに、民謡踊りや神輿のパレードも催され、夕べには灯籠流し、花火大会、屋形船とつづく。鏡のような穴水湾に、灯籠の火、屋形船の提灯がゆらめき、花火が夜空に咲き誇る様は幻想的。

◆あなみず祭時記

3月2·3日	だごだいまつり（下唐川）
4月 4日	さば祭り（木原）
4月 8日	げんぞまいり（甲）
4月第3土曜	川島祭り（川島）
4月28·29日	大町郷社祭り（大町）
6月 中旬	虫送り祭り（宇留地）
7月 中旬	長谷部まつり（穴水）
7月 下旬	中居キリコ祭り（中居）
8月15·16日	明千寺キリコ祭り（明千寺）
8月17·18日	沖波大漁祭り（沖波）
8月 下旬	甲曳き舟祭り（甲）
9月第2土曜	大町·川島祭り（大町·川島）
9月第2土·日曜	鹿波秋祭り（鹿波）
9月 中旬	前波曳山祭り（前波）
9月22·23日	岩車キリコ祭り（岩車）

8/下旬 甲曳き舟祭り

神輿を海に担ぎ込む

神輿が海を渡る、全国でも珍しい祭。加夫刀比古神社から氏子の若衆がご神体を2台の神輿におさめて海岸まで下り、のぼり旗をなびかせた台船に乗せ、海上を巡航して海の安全と大漁を祈願する。

歴史を訪ねて

古の繁栄の歴史を今に伝える名勝·旧跡

明泉寺

全国でも珍しい石塔五重塔

飛鳥時代に創建され、後に源頼朝が再建したと伝えられる真言宗の名刹。平安時代の仏像が多く残り、7m近い石塔五重塔は国の重要文化財に指定されている。

来迎寺

樹齢600年以上の菊桜

814年に創建された真言宗の古刹。中世の武将・長谷部信連ゆかりの寺で、境内には信連の手植えといわれる菊桜があり、県の天然記念物に定められている。不動明王像をはじめ寺宝も数多い。

長谷部神社

神社建築には特異な禅宗様

長谷部信連が自刻の座像を来迎寺の御影堂に安置したことに始まる。1644年に建立された本殿は、神社には珍しい禅宗様で、1935年に現在の城山東麓に移転された。

穴水城址

春には桜が咲き誇る

長谷部信連から、その子孫で能登の守護・畠山氏に仕えた長氏代々の居城跡。白波城とも呼ばれ、1577年に上杉謙信によって攻め落とされた。現在は公園となっており、城山の頂上からは美しい穴水湾が眺められる。

自然の息づかいを感じて… 四村地区

清らかな水が流れ落ちる滝谷滝

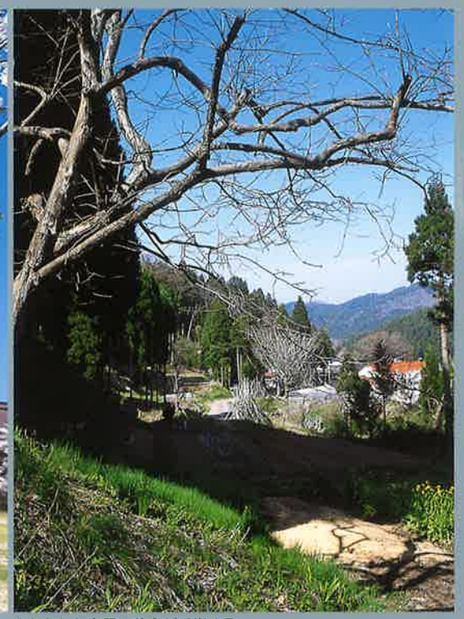
穴水町の西部、八ケ川の水源地帯に、北に大角間、南に越渡、東に桂谷、西の台地に上中の四つの集落が集まっているのが四村地区。一帯は周囲を山に囲まれた谷間になっており、今も茅葺き屋根の民家が残る集落の風景は、懐かしい日本の原風景を思わせる。

かつては林業で栄えた四村地区にはアテを含む自然林が多く、平成元年からその豊かな自然資源を利用した新しい村づくりが進められてきた。テーマは「花と緑と清流の山里」。春から初夏にかけて、各戸こぞって栽培したササユリとノトキリシマが競うように色鮮やかな花を開き、みずみずしい新緑に美しく照り映える。

せせらぎの音に耳を澄まして古道をたどれば、路傍に苔むした石標。鎌倉時代に曹洞宗の僧・峨山和尚が羽咋の永光寺から門前の総持寺へ通う道しるべとした峨山道石標で、往時をしのびながら散策するのも趣深い。

かぐわしい花の香りと目にまぶしい木々の緑、そして心を癒すせせらぎの音や野鳥のさえずり、いにしえの歴史の面影。四村地区には、現代社会がどこかに置き忘れてきた深いやすらぎがある。

旧上中小学校（平成7年3月閉校）の桜



やわらかな春風に草木が目覚める

キリシマが咲く峨山道

花々が山里に季節を告げる

静寂におおわれる白い季節

昔ながらの風景が残る上中集落

風光明媚な鋳物の里　中居地区

歴史が息づく集落へ

七浦七人と呼ばれるリアス式の海岸をまわると、波穏やかな中居の入江が目の前に広がる。古くから中居八景のうちの一景として賛美されてきたこの入江は、四季折々に違った美しさを醸し出してきた。

この入江にかつては「新艘造りて松前下る、下る中荷は中居釜」と「中居たたら唄」に唄われる中居釜を積む北前船が威勢良く出入りし、中居は北前船の寄港地として賑わいをみせた。

そんな賑わいがあったことなどまるで嘘のような静けさが靄（もや）となって入江から立ちあがり、訪れる人を包み込む。それはこの地区の鋳物の歴史が醸し出した残像なのかもしれない。

中居は鋳物の里と人はいう。加賀藩史に名だたる初代宮崎寒雉も中居鋳物師の血と技を受け継ぐ名工であった。しかし、平安または鎌倉まで遡ると伝えられる中居鋳物の歴史も盛者必衰の理（ことわり）のごとく、大正十三年、静かにその幕を閉じた。

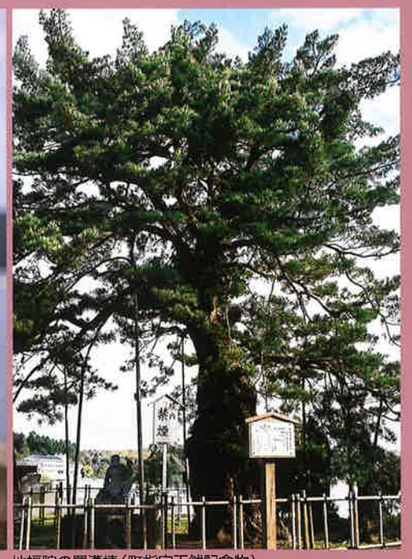
現在、能登中居鋳物館に鋳物師の技と歴史を記す史料が展示されており、訪れる人に当時の面影を伝えてくれる。

また平成六年に九ヶ所の神社仏閣を巡る「さとりの道」が整備され、中居南集落の格子戸の家並みとともに、この地区の歴史の重みを感じさせる散策路として人々の訪れを待ちうけている。

苔むした五輪塔は鋳物師たちの墓標か…

神社仏閣を巡るさとりの道

潮風に揺れる小道の花々



地福院の羅漢槙（町指定天然記念物）

150年前の明泉寺台燈篭など貴重な鋳物や、数多くの古文書が展示されている中居鋳物館

昔むかしのお話

穴水には、
不思議でおもしろい
伝説や民話がいっぱい
（『あなみず百物語』より）

踊る塩さば

昔々、木原村に三千年という長い行をつんだ白ムジナがおったそうナ。

この白ムジナは恐ろしい神となって村を荒しまわり、みんな困っておりました。そこで若い娘を人身御供に差し出すことになって何年か過ぎたある年のこと、六蔵じいさんの一人娘に順番が回ってきました。六蔵じいさんは大変なげき悲しみ、何とか娘を助けたいと思い、白ムジナの住む宮の床下に忍びこみました。どれほど時間がたったでしょうか。人ともケモノともつかない恐ろしい声が聞こえてきました。「このことばかりは越後の犬使に知らせるな。塩さば踊らせ人身はいらぬ」。かたことですが六蔵じいさんにはそのように聞こえたそうです。六蔵じいさんは大喜びで村に帰り、さっそくみんなに相談をしました。

最初は半信半疑で聞いていた村の衆もそのうちに「もしそれが本当ならこんな良い話はない」と喜びました。だけどすぐ困った問題があることに気がつきました。塩さばは死んだ魚です。生きた魚ならともかく死んだ魚を踊らせることなんて無理な話です。村の衆も困ってしまい、そのうち「今年は六蔵じいさんの番やさかい、六蔵じいさんに塩さばを踊らす役目を引き受けてもらおう」ということになりました。

じいさんは胸をしめつけられる思いで家に帰りました。しかし、大事な一人娘の事です。そう簡単にあきらめきれるものではありません。六蔵じいさんは昼夜を問わず一心に塩さばを踊らす稽古を積みました。そしてとうとう祭りの日がやってきました。六蔵じいさんは見事に塩さばを踊らすことに成功し、その間に『五郎兵衛』という名の犬を使って白ムジナをこらしめました。そして大事な一人娘を守ることが出来ました。

このことから、今でも例年四月四日の木原白山神社の春祭りには六蔵じいさんの子孫が神事を務めているとのことです。

沖波の官女伝説

これは、沖波に伝わる話です。

昔々、一人のうら若い娘が沖波にやってきました。その日も薄暗くなったので、さる家に宿を求めました。「私は都で、天子様の姫君をお世話していた下女です。姫は生まれつき言葉が不自由であったために若狭の国より乳母と二人空船に乗せられて海に流されてしまいました」「私は姫を捜すために諸国をさまよい、ようやくこの先の浜に流れつき無事でおられるとの噂を聞きここまでやってきた次第です。どうか一晩、軒先をお借りできませんでしょうか」。家の主は、この片田舎に天女のような若く美しい娘が訪ねてきただけでもビックリしたのに、天子様の姫君をお世話していた官女だと聞いてまたビックリ。あわてて、家の中に招き入れた。そして一部屋を官女に与えた。

家の主にはまだ若い息子がおり、天女のような官女を一目見ようと部屋をのぞき見た。官女はまだ起きており、燭のあかりが官女の顔を照らすなか、部屋から見える海を眺めておりました。静寂のなか、立戸ノ浜の沖にたつ波の音が定期的に調べのように聞こえてくる。官女は遠い都を思い出しているのか、それともこれから会う姫君に思いをはせているのか、その遠くを見つめる姿はこの世のものとも思えず綺麗であった。

そのうち、のぞき見る息子に気付いたものか「沖波の立つとはすれど寄せはせず」と即興の和歌を詠んだ。この家の息子は、なかなか和歌の教養があったようで、すかさず「東風という風いまだ吹かねば」と返歌を詠んだ。官女はこの返歌がたいそう気に入って、この家の息子と仲むつまじくなったそうです。

この沖波の官女伝説と古君の姫君漂着伝説はたいへん古いものと思われ、明泉寺創建と伝わる白雉年間にまでさかのぼるものと言われています。

ウデよし、声よし、器量よし

昔々。穴水に近在に聞こえたウデのいい大工で権佐という若者がおりました。

享保七年のことです。金沢へ出稼ぎに行った権佐は藩の御用商人で廻船問屋でもある木谷藤右衛門の屋敷のお抱えとなり、たくさんある倉や土蔵の普請をしておりました。あるとき、権佐は屋敷の庭でひとり得意の唄をうたいながら大工仕事をしておりました。そこは藤右衛門の一人娘おき乃の部屋の近くで、権佐のあまりの声の良さに障子戸をソッと開けて覗き見ました。「なんとステキな声なのかしら。アァ～。なんて凛々しい顔立ち」。カンナで削る音さえもとても心地好く聞こえ、シュッという音がするたびに十八歳のおき乃の胸がキュンと鳴るのです。そう、加賀の国一の大店の箱入り娘おき乃は権佐に恋をしてしまいました。

それから、日一日と障子戸の隙間が広くなり、そのうち、お互い会釈や片言を交わすまでになりました。もちろん、おき乃も大変な美人でしたので権佐がおき乃をすぐ好きになったのは間違いありません。二人は恋に落ちたのです。しかし、二人の恋には大きな問題がありました。大店の箱入り娘と使用人では身分が違います。藤右衛門が絶対に許すはずがありません。二人は悩み考えたあげく屋敷をソッと抜け出して、権佐の実家がある穴水に隠れ住みました。それを知った藤右衛門は怒って娘を勘当してしまいました。村の人々はそんな二人を噂して「なんと物好きな娘ヤ。折角、財産の沢山ある家に生まれ育ったガニ、ワザワザ貧乏しに嫁に来るなんテ」と村中の話題になったとのことです。

それから数年たったある年のこと、その年は大変な飢饉で村の人々はその日の食物も無い状態で大変困り果てておりました。そんな時、木谷藤右衛門の持ち船で五百石積み二艘が外浦より嵐を避けて穴水の湊に入って来ました。おき乃は船頭が顔見知りであることを幸いに穴水の窮状を訴え積荷の米を分けてくれるよう頼みました。

「勘当されているとはいえ旦那様のお嬢さん。大事な積荷だがお嬢さんに分けたと言えば旦那様も何も申すまい」。そう言って船頭は一艘分の米をおき乃に差し出しました。おき乃は五百石の米を飢えた人々に施し、村人は大変感謝しておき乃を悪く言ったことを後悔したと伝えています。その後、木谷藤右衛門の身代を継いだおき乃の兄に子供が出来なかったため、おき乃の次男が養子となったといわれています。

『ウデよし、声よし、器量よし』。三拍子揃った若者がヒョンな事から恋をして、苦難の末に加賀の国一番の嫁をモラったというお話でした。

能登半島と首都圏がぐっと近くなりました

能登半島のど真ん中、穴水町、輪島市、能登町にまたがる木原岳周辺で、
500ヘクタールの敷地に小型ジェット機が発着する
2,000メートルの滑走路、エプロン、ターミナルビル、駐車場(無料)などの
施設を備えた、緑豊かな「森の中の空港」となっています。
定期路線は、東京(羽田)－能登便が１日２往復就航。
東京から穴水まで１時間。

東京－能登便
ANA１日2便
往復就航

穴水町・穴水町能登空港利用促進会議
協賛:JAおおぞら旅行センター／(有)スカイトラベル／(有)トラベルセンター能登／のと鉄道旅行センター

［福祉・健康］

安心して暮らすことができる、安全でやさしいまちに

穴水町では、3人に1人が65歳以上に達しており、今後の施策として介護予防策が重要課題となっています。予防検診体制を一層充実させ、疾病の予防、早期発見に努めるとともに、相談機能、寝たきり防止のソフト事業の強化に努めていきます。

また、少子化時代の到来にともない、子どもを取り巻く環境も急激な変化を遂げています。学童保育、医療費の助成などの子育て支援事業や、児童虐待の防止体制の確立も図り、だれもが安心して暮らすことができる、安全でやさしい福祉のまちづくりを推進していきます。

住民登場

ふれあいのネットワークづくり

穴水町社会福祉協議会会長　堀河　實映さん

「穴水町社会福祉協議会では、訪問看護や配食サービスなどの在宅生活支援、高齢者にいきいきと日々の生活を過ごしていただくための活動、ボランティア活動への支援などを行っています。地域の人たちが住み慣れた場所で安心して生活することのできるまちづくりを実現するため、関係機関と連携しながら様々な取り組みを進めています」

［教　育］

学校と家庭と地域が力を合わせて個性の教育を進めていきます

21世紀は、個性伸長を重視し、生涯にわたって、自己の向上を図る学習社会の実現が要請されています。

穴水町では、学校、家庭、地域が教育の連携を図り、町民憲章の理想を追い求めることにより、心豊かな生活の実現と、積極性、創造性に富む人間の育成を目指します。

そのために、教育委員会をはじめ学校、関係諸団体との連携を密にするとともに、町民各層の理解と協力を得て、さまざまな施策を進めていきます。

住民登場

豊かな人間性を育む

穴水町教育委員会委員長　米田　保さん

「教育の基本は人づくり。知識をただつめこむのではなく、それをどう社会に生かしていくかを教えなければなりません。穴水ではふるさと学習の一環として、民謡や太鼓をとりいれている学校もあり、地域と一体となって特色ある教育を目指しています。穴水の自然のように、子どもたちに美しく豊かな心を育んでいきたいです」

［産　業］

観光と結びつけて各種産業の育成を図っていく

穴水町の主な産業は、農林業と漁業です。農業は稲作を中心に、野菜、葉たばこ、すいかなどを栽培。また広大な林野では、「能登ヒバ」「石川スギ」などの良質な用材を産し、植林も盛んに行われています。漁業では、七尾湾で行われる定置網漁業や沿岸漁業を主とし、かきの養殖も盛んです。

しかしながら、産業のほとんどが兼業であり、後継者不足や高齢化などの問題を抱えています。能登空港の開港にともない、空路を活用した新たな産業の創出を推進するとともに、「まいもんの里・穴水」のイメージをより一層浸透させる、観光と結びつけた食産業や商業の育成を図っていきたいと考えています。

住民登場

穴水商店振興会会長　吉村 扶佐司さん

町の中心商店街として頑張る

「長谷部まつりやカフェ・ローエルなどのイベントに積極的に参加したり、商店街の真ん中にポケットパークを整備したりなど、街なかの中心商店街にお客様を呼び込むいろいろな取り組みを進めています。これからは特に高齢者や子どもたちに優しい商店街としても頑張っていきたいですね」

ANAMIZU まちづくりビジョン

［環境整備］

快適で、美しく、文化的なまちづくりに努めます

浄化センター

青い海、緑の高原、自然とともにある穴水町の美しい環境を保全するため、衛生施設（クリーンセンター、最終処分場）や下水道の整備を図るとともに、ゴミの分別収集、リサイクルを推進し、環境に優しく、快適で文化的なまちづくりに努めます。

住民登場

穴水生活学校代表　工藤 佳津子さん

自然環境を守るために

「私たちの活動は地域のさまざまな問題を考えて解決していくことです。具体的には川の水質調査をはじめとする、環境問題に対する活動や古切手やプルタブを収集などのリサイクル活動を進めています。最近、省エネに対する住民の意識が高まってきているのがうれしいですね。これからは、子供たちにも自然のものを使って生活していく大切さを伝えたいと思っています」

[文　化]

豊かな伝統文化の継承と地域文化の創造をめざして

奥能登の玄関口にあたる穴水町は、古代より陸路と海路が交錯する交通の要所で、波静かな七尾北湾はさまざまな文化をこの地に育み、町の歴史の中にとどめてきました。

このような地域性と風土は、私たちの心の中に継承され、豊かな心を育む力となっています。今後とも豊かな伝統文化を継承し、新たな地域文化を創造しつつ、次世代へひきついでいきたいと考えます。

住民登場

民謡伝承に思いを込めて

中居民謡保存会・幹事　小林　実さん

「中居地区の民謡『中居まだら』『中居ばやし』『中居たたら唄』の3曲を、次代に伝えていくことが私たちの役目です。毎年秋の町民文化祭で唄声を披露しています。子供たちと一緒に『たたら唄』を唄うことが、私の最高の喜びです」

[行政・議会]

町民とともに明るく豊かなまちづくりを

議会風景（議員側）

行政（執行機関）と議会（議決機関）がそれぞれの責任と権限をもって、町民の意思を反映すべく民主的に運営を行っています。

町議会は、町民の代表者である12人の議員で構成され、条例や予算案を審議し議決する機関です。議会の開催は、年4回の定例会と必要に応じて開催される臨時会があります。常任委員会は、総務産業建設・教育民生の2つの委員会が設置されています。

石川町長と大霜副町長

「すみよいまちづくり」をめざして

穴水町長　石川　宣雄

手のひらの親指のような形をして日本海に突き出ている能登半島。その中心部にある穴水町は能登空港から近く、奥能登への交通網の要衝であります。

私たちの町は、古くから海の幸と山の幸に恵まれ、四季折々の旬を味わう「まいもんまつり」を開催し、訪れる人に喜ばれています。どうぞ、春夏秋冬の自然の息づかいを感じ、素朴な人情に触れ、豊かな食材を生かした料理を堪能してください。

穴水町においても、今までに経験したことのない、人口減少時代に対応するために、行政と住民が協働し、住民の合意形成を軸とした「すみよいまちづくり」を推し進めていくものであります。この町勢要覧が穴水町を知る上でお役に立てれば幸いです。

Anamizu History

——アナミズ・グラフ——

大正期／小又川より城山を望む

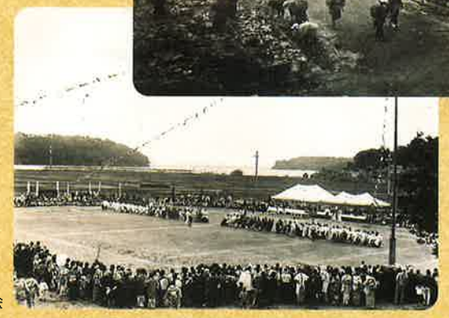
明治44年／穴水高等小学校建設

大正13年／穴水スキー倶楽部

大正中期／穴水中心部

大正末期／穴水大橋

昭和4年／穴水大火



昭和10年頃／穴水高等小学校運動会

穴水町のあゆみ

【明治】

22年・市町村制が施行され、諸橋、兜、中居、南北、穴水、島崎、東保村の7村になる
36年・穴水村、町制を布く
41年・穴水町、島崎村、東保村が合併

【大正】

5年・水害に見舞われる（浸水6尺、浸水家屋600戸、死者5人、交通通信不通）
6年・大雪に見舞われる
・水害に見舞われる
・乗合自動車路線が延長される（穴水―輪島、穴水―宇出津間）

【昭和】

4年・穴水町大火（住宅145棟、土蔵34棟、納屋68棟、寺院全焼、被災世帯161戸）
8年・中居村と南北村が合併し、住吉村誕生
・七尾線の穴水―輪島間開通
・穴水町役場庁舎新築
9年・漁業組合設立、かき養殖事業に着手
29年・穴水町、住吉村、兜村が合併し、「新穴水町」が誕生
30年・旧諸橋村編入合併
32年・町章制定
・公立穴水中央病院開設
・穴水町上水道通水
33年・奥能登に豪雨、災害救助法が適用
34年・能登線穴水―鵜川間開通
・豪雨により災害救助法が適用
39年・町村合併10周年
40年・穴水町・門前町環境衛生施設組合設立
43年・能登半島国定公園に指定
48年・穴水町役場庁舎落成
・山村開発センター落成
49年・能登地区広域農道開通
・町村合併20周年

昭和30年頃／穴水市街地を一望

昭和30年頃／穴水駅前

昭和49年／能登地区広域農道開通（穴水―柳田間24.6km）

昭和56年／公立穴水総合病院新築落成

平成19年／能登半島地震

昭和50年頃／穴水町此木インター建設工事（昭和53年／能登縦貫道・此木―中島町横田間15.9km開通、昭和57年／能登有料道路・此木―金沢市粟崎町82.9km全線開通）

*現在の穴水町此木インター付近

50年・穴水町総合計画策定（基本構想）
52年・奥能登広域圏事務組合設立参加
54年・向洋中学校新築落成
56年・国民保養センター「真名井」落成
・公立穴水総合病院新築落成
57年・上野水道管理センター落成通水開始
59年・町村合併30周年
60年・町営バス運行
・いしかわ総体ヨット競技開催
62年・まいもんまつり始まる

【平成】

3年・「キャッスル真名井」落成
・第46回国民体育大会相撲競技開催
5年・山梨県八田村姉妹町村提携
6年・「のとふれあい文化センター」落成
・町村合併40周年記念式典
・「潤いと活力のあるまちづくり」優良地方公共団体自治大臣表彰受賞
7年・能登中居鋳物館開館
・「のとふれあい文化センター」キャンプの森完成
・「老人保健施設あゆみの里」「デイサービスセンター」「在宅介護支援センター」「保健センター」落成
8年・防災行政無線放送開始
10年・訪問看護ステーション開設
・能登空港着工
12年・「まいもん体験農園」開設
・坂本三十次氏に初の名誉町民の称号が贈られる
・穴水浄化センター落成
13年・のと鉄道（穴水―輪島間）廃止、バス運行
・町営バス・スクールバス一元化
・「ふるさと体験村・四季の丘」開設
15年・能登空港開港
16年・町村合併50周年記念式典
17年・のと鉄道（穴水・蛸島間）廃止、バス運行
18年・ワイン醸造所「穴水まいもん工房」開設
19年・能登半島地震に見舞われる

穴水で遊ぶ！

収穫体験 観光農園

いちご、ぶどう、メロン、じゃがいも、さつまいもなど、季節ごとに収穫の喜びを体験。

花の迷路 穴水まいもん体験農園

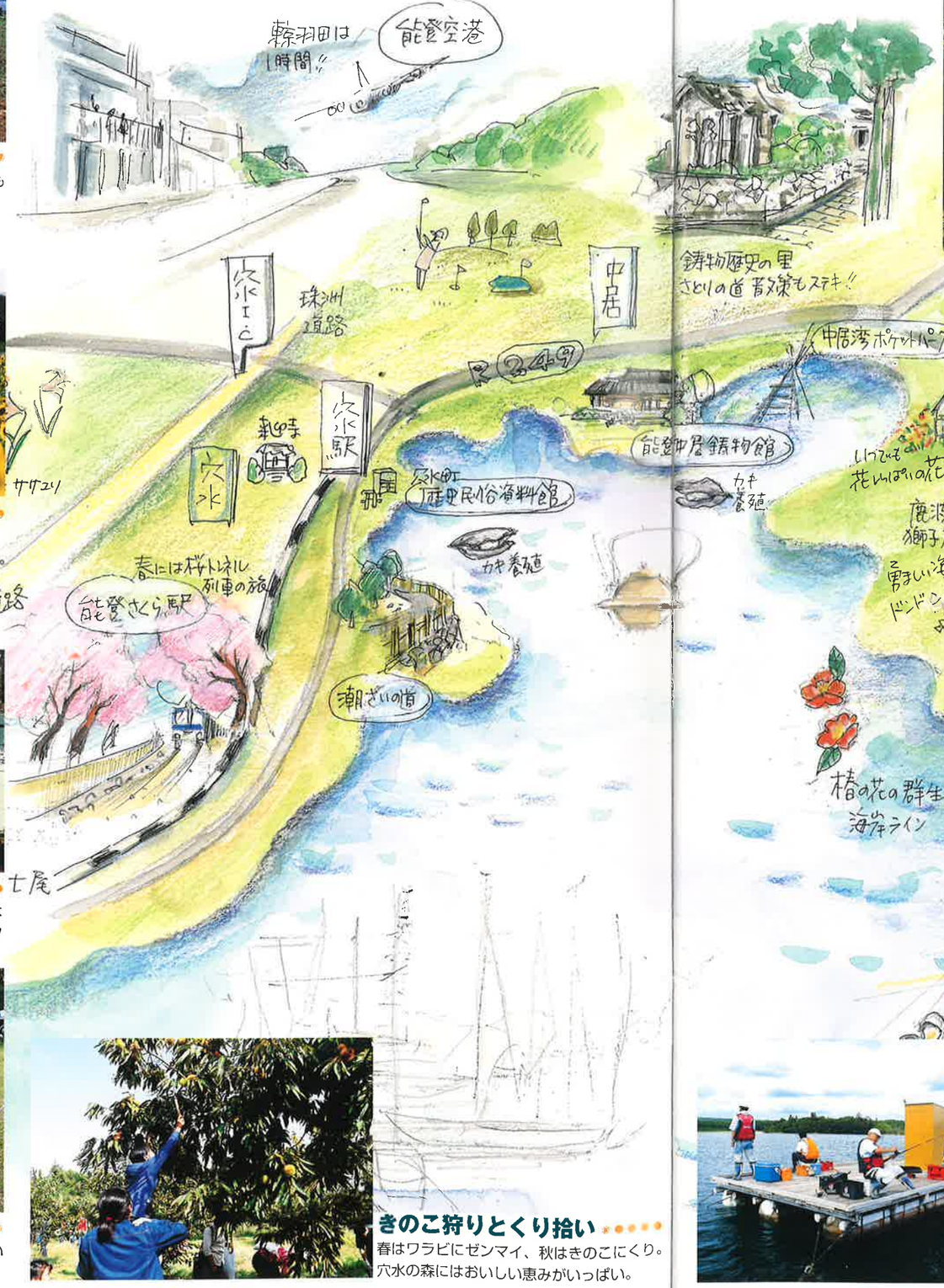
夏には1ヘクタールの敷地にひまわり村が開村。10万本のひまわりと1,000mの巨大迷路で遊ぼう。

テニス のとふれあい文化センター

スポーツでさわやかな汗を。文化センター周辺には町営相撲場、陸上競技場、野球場があり、スポーツが楽しめる。

キャンプ 親子ふれあい村キャンプの森

大自然の中で、ゆったりしたひとときを。ふれあい広場やファイヤーサークル、炊事棟も完備。



きのこ狩りとくり拾い

春はワラビにゼンマイ、秋はきのこにくり。穴水の森にはおいしい恵みがいっぱい。

釣り 釣り筏

いつでも気軽に釣りが楽しめる釣り筏。波静かな入江で、ハチメ（メバル）やクロダイを。

穴水町
〒927-8601 石川県鳳珠郡穴水町字川島ラの174番地
TEL(0768)52-0300(代) FAX(0768)52-0395
E-mail anamizu@town.anamizu.ishikawa.jp
http://town.anamizu.ishikawa.jp/

アナミズ
まいもんニュース

おいしいかきに、おいしいワイン。

穴水町では、かきにあうワインづくりをめざして、ぶどうの栽培に取り組んでいます。

まいもんラインナップ

赤土すいか

昼と夜の温度差が激しい能登の気候と、ミネラル分に富んだ赤土が、甘みのあるすいかを育てます。

赤土じゃがいも

赤土でつくられたじゃがいもは、肌が細かく、ほくほくしたおいしさ。いも掘り体験も人気です。

能登二子山くり

穴水町東部の二子山周辺はくりの名産地。秋の休日はくり拾いで賑わいます。